

2. アイヒベルクのスポーツ空間史論

—「批判的スポーツエコロジー」の論理—

上野 卓郎

Henning Eichberg, *Leistungsraeume. Sport als Umweltproblem*. Muenster Lit Verlag, 1988 (Sport : Kultur, Veraenderung; Bd. 16) をとりあげてその理論内容を報告する。

1. スポーツと空間的環境、2. 分割症候群の歴史、3. 産業時代のスピード症候群、という本書の三部構成について序文の言うところをみる。「批判的スポーツエコロジーの確立のためにどんな文献と専門科学を引き寄せ得るか、ということで第1章は空間の現象学、建築の様式史、空間構造の心理学、記述民族学、歴史が運動するものの社会・文化的エコロジーという批判的な一点に集合することを示す。その際、分割された屋内世界 (Hallenwelt) は歴史、変化をもつ。これが概観でも、ベルリンの地域史的事例でも示されるであろう (第2章)。スポーツの作り上げられた達成世界 (Leistungswelt) は外的内的連関をもつ。住宅の箱世界 (Schachtelwelt) と自動車優先の死の世界 (Todeswelt) との連関を (第3章)。新しい経験 [対抗経験—上野] で我々の行動の新しい視野、結果と達成に関係づけられる生産主義的行動決定の批判という視野が生じるであろうか。」

この最後の問題への回答は、しかし、明快でない。たしかに「批判」ということなのだが、オルタナティヴとエコロジーの論理そのものにも限界をみているため、著者自らの立場の宣言としては「批判的スポーツエコロジー」確立の提唱にとどまる。

環境問題としてのスポーツという本書のサブタイトルについて著者は次のように位置付ける。「スポーツによる直接的な環境破壊 (モータースポーツ、干潟でのヨット競技、テニス騒音公害、モーターボート) はこの考察のもとではさしあたり二次的である。それらの基礎にある社会的問題、産業的機能主義、環境の『達成空間』への加工こそ優先的なことなのである。」この説明は重要で

ある。現象でなく本質としての環境問題の所在を「達成空間」への環境の加工をもたらす産業的機能主義の問題に求める、その思想でのスポーツ空間史論であり、他方でハーバーマスが提起した「近代のディスクール」論での著者の近代把握の位置付けの問題も内包したスポーツ論として、本書を取り上げる理由である。結局のところ著者のスポーツ像、スポーツの「達成空間」化、したがって、スポーツ空間史論における近代把握の論理が中心的な論点となる。私にはなおその像が鮮明でない「批判的スポーツエコロジー」の中心的タームを列挙すると、既存のもの「自明さ」への批判、相対化、歴史性・可変性、身体経験、感受性 (感度の増大)、構造化などが指摘できる。

批判的空間史記述という項で彼は言う。「文化的相対性と差異性が空間の歴史的相対性と可変性にも相応することは、最近の空間史的記述の成果であり、1960年代以来、視線 (まなざし) の歴史として発展している。視線の歴史の出発点は、産業文明的空間の『生活の質』への新しい批判的洞察であった。産業社会の空間は、1. 拡張的な速度と前進の素質、2. 進みながらの分割、3. 新種の外装、によって特徴づけられる。これらが一緒になって、4. 支配の視線による空間の構造化、身体に付与される『権力のマイクロ物理学』の関連での空間の権力化として現れる。これは全て特殊な仕方でもスポーツとも結びついており、そこからスポーツ空間の歴史と未来への新たな問題が明らかになるのである。」

このような見地から次の4つの概念が提起される。1. 「拡張」 (Expansion) : これはシベルブシュ『鉄道旅行の歴史』や自動車史によって確認され、速度支配 (Dromokratie) の仮説も含む概念だが、スポーツが18/19世紀以来時間と時計をめぐる運動 (Uebung) の複合体として発展すること

によって他のよく知られた身体文化とは際立って能力向上、緊張、速度を特徴とする。こうしてスポーツ空間の二方向性が生じる。つまり、緑・戸外に出る拡張的衝動と、それとは対照的な達成原理と空間の均質化・標準化による環境の建築的植民地化という形で。2. 「分割」(Parzellierung)：機能空間の分離、空間的生活連関の分割を意味し、フーコーが参照される。スポーツは、街路の没収、教育上の分割の成立、屋内施設の歴史に関わってこの空間秩序の過程と結びつく。街路のスペアとしてのスポーツ施設、学習隔離と「かのように」[擬似]世界、例外空間、体育、それらとは全く別の過程としての屋内施設。3. 「外装」(Panzerung)：仕切り、限定の意味だが、要塞から境界の再編、防備施設の転換と関わる。身体の外装、姿勢と画一化、身体的要塞化、流動的なものの排除がこれに含まれる。4. 「全景構造」(Panoptik)：これもフーコーに依っているが、この概念は、panopticon (英)、Panoptique (仏) = 円形監獄、全景構造物、からの造語。意味は、権力化、支配の視線からの施設、身体の支配、自然の支配、人間のコントロールである。空間の後期産業的装置として「手入れ簡単な」空間形態が出現するが、歴史的には矛盾があり、17/18世紀の社会幾何学的視線と18世紀後半の全景構造的視線とは区別されなければならない。その中で衛生的・社会衛生的視角でのスポーツの新しい環境(健康の促進)の成立と、しかしその幻想とが把握される。

アイヒベルクはこうした基本概念に基づくスポーツ空間史論を展開する前に、改めて産業文化史からの問題をなげかけている。「歴史的建築の成果としての、歴史的に可変的な感覚の対象としてのスポーツ場」の「将来の建築課題に対する感度の増大」への寄与にスポーツ空間史論の意義づけをはかる議論のなかで、遊園地の「ディズニール化」、風景(ランドスケープ)に代わる「スポーツケープ」のプラスチック世界を欲するか否か、という印象的な問いが発せられる。これには明らかに否という答が予想されている。しかし、それ

で彼の理論方向にもつき従うと期待するとすれば、いささか甘い。産業文明一般への拒否でなく、産業化の規制の志向が彼にないことはないけれども、むしろ眼目は「感覚」「感度」の問題ということのようである。

さて、ここから本書の40頁に及ぶ「壁の間の達成—スポーツの空間」の内容に入ろう。その記述は大抵に言えば、緑、戸外と屋内文化の入れ替わり、平行・併存、「革命」(緑、身体、社会の)の過程としてスポーツ空間のドイツ近代史を描くもので、興味深い。

1800年頃の第一の、1900年頃の第二の緑の波あるいは革命の間に、第一の波(汎愛主義、グーツムーツ、ヤーン)以前の貴族的屋内文化とは異なる矛盾した復古的形状としてのホール(Halle)が成立する。これに対して1848年革命でのトゥルナー(とくに女性の)の「自由」への要求と挫折の歴史が強調され、第二の波として、ワンダーフォーゲル、ヴァンデルン、労働者スポーツ、戸外トゥルネン、遊戯促進運動、屋外水泳、スポーツ衣服改革、裸体主義運動、野外劇場、民衆公園が挙げられる。以上を論じた後の「『身体革命』と社会の革命」の項の次の記述には疑問がある。「スポーツとその場の変革は組織の問題だけでなくによりも感覚的欲求の問題なのである。」あの時代は組織の時代ではなかったか。そして感覚的欲求の組織化をめぐる国家と市民社会のせめぎあい、社会主義運動とスポーツ・文化・教育運動の結合の時代ではなかったか。

一方、「スポーツの空間的植民地化」の項での身体運動の空間の連続と不連続としての「ナチススポーツ」論は、1945年を転回点でなく、復古段階内部での移行として捉える点で注目したい。つまり、1848年革命期と1945年が「復古」=挫折した革命としてスポーツ史に刻み込まれるのであるが、その際に著者がメルクマールとするのは、スポーツ空間の集中化、屋内訓練化、直線性の継続ないし強化、とくに象徴的なものとしてのスタジアム建築である。

第二次大戦後、とくに1970年代以降、空間のスポーツ上の、またそれと幾重にも結びつく旅行上の「開発」への新たな批判と、レクリエーションとスポーツの空間の社会的意義への感覚と政策的対応の成立にもかかわらず、新しい「緑」の批判の背景をなす実践的变化は極めて矛盾したものだったという。ここで区別されるべき三つの傾向が指摘される。1. 壁への閉じ込みと緑の模造。学校体育館だけでなく商業的分野でもトリムスタジオやスカッシュセンターなど。2. 新しい野外運動。スキー、ハングライダー、スケートボード、ジョギング、オリエンティエリング。だが、これを第三の緑の波とみるのは早計。70年代にスポーツ自身がエコロジカルな批判の標的となったからである。環境破壊的作用のスキー、モーターボートスポーツ、工場風景と対抗せずそれと一致するモノカルチャー形成など。新しい技術学的水準でのアンシャンレジユムの屋内・人工世界の再生産としてのスポーツ施設の進行。3. 新しい運動文化の芽生え。一部は瞑想的、一部はダンス的リズム的、一部はパントマイムの表現的なもの、一部は新しい(ないし古い)遊びで、これまでのスポーツ空間を放棄する。だが、これによってスポーツ施設の形態と境界のみならずスポーツ活動そのものの境界が流動化する。およそスポーツとは何かということのアウトラインも曲がり錯綜したものになる。ここでも依然として第三の波ということは控えられる。

こうした把握の中で私の関心を惹いたのは、「自然」概念との関連である。彼によると、スポーツにおける最近の「緑の波」は産業文化以前の段階からの失われた抗議、潜在力の周期的再開であるだけではない。これが新たな革命的希望(と幻想?)とパラレルに進むかぎりそうしたことと一致するが、今や「自然」とは何かに関わってこれは区別される。

1800年頃の第一の波は、新しい自然概念が古いものに立ち向かったことによって特徴づけられる。18世紀まで支配した古い自然概念は、秩序概念(自然の秩序、自然法則、自然科学、人間の自然、

事物の自然)で常に自然は全体であった。上位に置かれた合法則性から(しばしば幾何学的・数学的なものとして表象され)記述され得るような全体。そうした秩序は訓練ホールにも反映する。それに対して18世紀後期の新しい自然概念は、抵抗概念(自由な自然に出よう、自然に返れ、自然保護、自然さ)で、自然は今や外で(ここでなく)求められるべき別のものだった。一個のユートピア、対抗世界、「自由」、それをヴァンデルンで森の中の遊戯で見いだす。しかし、その拡張的性格によってこの自然概念は、産業文化的植民地化のダイナミズムにも寄与する。緑に出よう、そこで建築し、スポーツをし秩序を作る。足場と器具を備えた緑の中のトルネン広場が移行点を示すことになる。それから後になると、自転車ツアーからベロドローム(屋内自転車競技場)を経てアウトバーンへの道である。これに対して、現代の「緑」と「草の根運動」があるが、エコロジカルなスポーツ批判とオルタナティブな運動文化では外に向けられるダイナミズムと希望は余り感じられないというのが著者の診断である。

それでは新しい第三の自然概念になり得るものは何か。これについては彼は問題提起するにとどまる。そうしたものが新しい現象の中で(緑に入ろう、都市と生産の内部での自然の(再)回復、外での直線に代わる内での曲線など)身体的に模写されているか、そのとき運動文化が展開される空間的形狀はどうか、そして新しい自然概念はおそらく新しい技術学との相互作用から生じる新しい生活世界との連関にあるのか、あるいは高エネルギーの「情報社会」がその身体文化をこともあろうにかつての産業社会と同じスポーツ環境の中で展開していくのがありそうなことか、と。

こうして彼が定位するのが、60年代以降欧米で著しい受容をみる東アジアの瞑想運動、体操的なものと精神的なものとのエレメントを結合した精神的身体文化(ヨガ、太極拳、禅、健康教育的・バイオエネルギーの身体力学の方法)である。これに対する社会的重要性についてはまだ不明だとしてもその空間性の新しさは明らかだという。その

理由は、移動（前進）による環境の植民地化もせずスポーツ施設への改造も必要としないこと、その空間は複雑な日常生活の手元にある空間であることである。東アジアの闘争術（合気道、カンフー、テコンドー）やアフロダンスも挙げて、そこに一時的な流行の問題でなく、歴史的比較で空間のスポーツ的分割化に対する革新が認められることを評価する。

最後に、「スポーツ空間形状と社会」という問題をみてみよう。彼によれば、スポーツ空間の構造変化は身体運動と環境の間の具体的連関を認識させるものである。身体は皮膚の表面で終わるのではなく、それを取り巻く空間にまで届き、その空間的広がり、固定的で前もって定められたものではなく、歴史的で社会的変化に左右される。次のような歴史的事例が挙げられる。プロイセン的秩序トゥルネン（恭順訓練、命令と時間でのドリル、機械トゥルネン）での身体形成とピーターマイヤー期の体育館との間の形状的連関、それへの反対としての1900年頃の遊戯・スポーツ促進運動の戸外からの開始、にもかかわらずその後の壁の間の身体的達成としての戸外から屋内への移行——こうしたスポーツ空間の変化はどう説明されるか。スポーツそのものからの自然的、技術万能主義的理由（天気から守るのは「自然（ナチュラ）」だとか、「技術学的強制」が屋内文化を必要とした）は歴史的概観からして到底不十分だという批判を彼は展開する。自然的理由に対して、社会発展の一定の段階では身体運動で天気に身を晒すことが逆に自然だとみなされたことから、理由にならないことが示され、技術万能主義的理由に対して、ホールを生み出したのが産業化の技術学革命からでなくアンシャンレジュウム（アンシャンレジュウム）の訓練ホールで前もって形作られたことから、非歴史的だとされる。また、スポーツ空間の「健康」についても統一のない一貫した答がないことが示される。身体運動の医学的・衛生的にふさわしい環境の規定のための歴史的に不変の基準はなく、健康専門家や医師がケース・バイ・ケースで様々に言ってきただけだというのである。

ここまで来て重要な概念を取り上げないできたことに思い至った。それは「達成空間としてのスポーツ」というときのアイヒベルクの「達成原理」把握である。彼によれば、達成結果の比較可能性への関心による技術的競争条件の対等化、空間の均質化・単一機能化、それによる種々の分割化の招来（天気の影響からのホールによるスポーツの分離、労働と住居、労働時間と余暇の分離の連関でのスポーツと非スポーツの分離、スポーツ種目の分離、達成クラス、とくに年齢グループによる分離、子供の分離）がその概念内容である。しかし、この概念だけでは「身体のスポーツ的分離」の説明ができないことを自認している。「達成原理、支配、革命」という項がその説明のための「決定的テーゼ」を得るはずなのに、提起した心性・構造史の手掛かりの有効性の検討の結論は不鮮明で、フーコーなどの支配、社会階級の仕切りによるホールの促進を「達成原理」の補完的テーゼとして採用すること、エリアスの「文明化過程」論が採用し難い理由（身体、日常から規定される包括的な形状の一部としてのスポーツにおける分離というアイヒベルクの見方に方向は向いているが、エリアスの直線的・喜ばしい進歩発展のコノテーションはこの過程の複雑さと植民地化していく暴力行為と一致させることは難しい）の開陳以上に読み取るものはない。

批判的摂取の立場から「スポーツの本質と構造」の理論、あるいは「スポーツ文化構造論」の構築に関わる記述に偏ったことをお許し願いたい（スポーツ心理学・スポーツ空間のトリアレクティクを本稿で省いたことは片手落ちだった）。

*アイヒベルクその人については、Stadion. XVI, 2, 1990. での彼の論文：“Gefährlich Denken”: Ueber Rationalität und Angst in der Sportwissenschaft. (S. 223-255)から多くの情報を得ることができたが、それについては他日を期すしかない。（1942年シュレーゲン生まれ、1984年からコペンハーゲン大学文化社会学研究所。）